

地學雜誌第十九年第二百拾七號

明治四十年一月十五日

論 說

小亞細亞橫斷旅行談

工學博士 伊 東 忠 太

小亞細亞の旅行談をする前に小亞細亞の土地の有様を一通り御話した方が、便利だと思ひますから先づ小亞細亞全體の地形及歴史の一斑を御話し、ます

小亞細亞とは元來 Asia Minor の直譯で、我々は今日小亞細亞と通稱して居りますが實際其の土地に行つて見ると小亞細亞と云ふ意味の言葉は用ゐられて居りませぬ、土耳其人は小亞細亞のことをアナドルと呼て居る、即ち歐羅巴人の所謂アナトリアのこと、アナドル即ち小亞細亞はどれだけの範圍を包括して居るか、と云ふと、是は非常に漠然として居て一向定つた限界はありませぬ、附圖第三版は小亞細亞の一部分ですが、御承知の通り北は黒海、西は希臘の多島海、南は地中海の三方の海から取圍まれて居る一つの半島であります、こちらの東の奥の方はどこまでを含まれるかと云ふことは一向定つて居りませぬ、それで大凡叙利亞と小亞細亞との此の境にアレキサンドレット即ちイスケンデルンの灣があります、イスケンデルンの灣から東北の方に斜に引いて行く

論 說 (小亞細亞橫斷旅行談)

大凡此の邊の所に黒海に臨んでトレビゾンドと云ふ港があります、大凡此の線の以西を通稱アナトリアと云つて居るのであります、

今日土耳其政府に於きまして此のアナドルを幾つかの州に分つて居ります、其の名稱は第一ダトダネルス海峡の邊をビガーと云ひ、其の南多島海に面する地方をアイヂンと稱へて居ります、それからマルマラ海の南の邊から深く内地に入り込んでフダベンチギアル州があり、マルマラ海の東にイズミッド州があります、イズミッドの東黒海に沿ふた地方をカスタムニ州と云ひ、その南の高地をアンゴラ州と稱へ、それからその又南の高地から一部地中海に出て居る地方をコニア州と云ひ、其の東南の隅に當て地中海の東北隅に臨む地方をアダナ州と云ひ、アンゴラ、コニアの東の方に當るのをシワス州と稱して居ります、シワスの北の一體黒海に面する部分がトレビゾンド州である、先づ是だけの州を總稱して小亞細亞或はアナドルと名けて居るものと解釋して差支ありません、

小亞細亞の地形は中央の部分が非常な高原で、其の高さは平均海拔三千尺を出入して居ります、西北南の三方に向つて急に斜面が海まで延びて、殊に南の斜面はタウルス山脈に由て明瞭に畫成されて居ります、タウルス山脈は殆ど地中海に並行して走り、東はアルメニアの高地に行て次第に消えて仕舞ふ、此の山脈は小亞細亞中で一番に目立つ大きな山脈で、地理上にも歴史上にも最も重要なものゝ一つてあります、其最高峰ブルガル岳は直立一萬二千尺に及びます、但し小亞細亞第一の高山はカイザリエの南方エルジエス岳で直立一萬四千尺あります、それから北と西は高原と低

地との境が明瞭に無くして非常に複雑な山脈に依つて漸次低地に下つて居ります、さう云ふ地形です。からして小亞細亞には大なる河はありませぬ、稍々大きな河は北の方に流れるキジール、イルマク河、是は歴史的には有名であるが河としては役を爲して居りませぬ。一向運輸の便にはなりません。之に次てサカリア河も同様無用な河であります。南の方はタウルスの急斜面でありますから大きな河はありませぬ、只だサロス、プロムスの二河は歴史的に有名であります、西海に注ぐ河の中でメアンデル及ヘルモスの二河は古來尤も有名ですが、均しく運輸の便を與へません、小亞細亞の地形は概略右様な譯です、

斯かる地形ですから南の方より西の海岸の低地の部分は土地が豊饒で氣候も溫暖ですから、昔から繁昌した國もありました、此の内地の方は曠漠たる平野で氣候も寒く交通運輸の便の無い爲に、昔から此所に大きな國の出來た例はありませぬ、一時出來ても長くは續きません、それで御承知の通り古代希臘時代からして長く榮へた土地は皆な此の多島海に面した地方で、此地方は一番早くから開けましたから従つて遺物の古い面白い物が、此の海岸及び近海の島嶼に澤山存在して居ります。

次ぎに小亞細亞に往つて居る人種に付てざつと御話すると、之を三種類に大別することが出來ます、第一は土耳其人種で、是は大多數であります、其の中著しいものはオスマン、トルコ即ち今日の土耳其政府を建つたオスマン、それからセルヂユーク、トルコ即ち今のオスマン、トルコの這入る前に此小亞細亞の内部に國を建つて居つたセルヂユーク、トルコ、それからトルコマン、タータル

と云ふ風に土耳其人の中にも色々の種類が分れて居り、一見しては殆ど別人種かと思ふ位に違つた容貌を持つて居ります。第二はアルメニヤ人で、之は一種特別の文字と言語を有て居ますが、言語は印度語に似て居るのは不思議です。その人口は今日世界中で四百萬と云ふことであります。其中二萬人以上は此の小亞細亞の内に住つて居る。アルメニア人の根據地は東方の山地ですが併し小亞細亞到る所にそれが分布されて居ります。重にも通商貿易に従事して金を儲けるのは一番上手だと云ふ評判がある。それ故に餘り他の人種からは好く言はれない。第三は希臘人で、主として海岸地に住つて居る。尤も内地にも這入つて居りますが、内地の方は比較的少ない。土耳其人は希臘人をユナンと呼び、希臘國をユナニスタンと呼びます。これはイヲニヤ人と云ふ意味から轉訛したのです。以上三種は重要な民族であります。其外に露領の高加索地方から這入つて來て居るチェルケス人種それからメソポタミアの北境なるクルヂスタンから這入つて來たクルド人種、是等がずつとアンゴラ邊まで這入つて居ります。シワスにも澤山居ります。即ちクルド人は多島海邊の方までは來て居ませぬがチェルケス人の方は到る所に分布して居ります。其外にスラヴ人種に屬するブルガリア人は歐州から亞刺比亞人は叙里亞の方から這入つて雜居して居ります。細かいのは此の他にも猶太人を始め澤山ありますが、重もな人種は今御話した通りであります。是等の人間の宗教は土耳其人は回教、アルメニヤ人はアルメニア教と云ふ。耶蘇教の一種。希臘人は希臘教を信じてをります。

小亞細亞の交通線路は今日の場合では土耳其の首府が君士坦丁堡でありますから、之を中心と

して國道が其領土内に敷設されて居る、其亞細亞方面の幹線は、今日は叙里亞街道とバクダード街道が一番の幹線になつて居ります、叙里亞街道は君士坦丁堡からボスボラス海峡を渡つて對岸のスクタリアに来て、此所からイズミツドを経てエキシエフキルに至り、更にコニアを経てアダナと云ふ所に出ます、それからイズケンデルンを経てアンツポに至り、ダマスカス及ベールトに達し、なほ下でジェルサレムに達します、其の次はメソポタミア街道であります、それは君士坦丁堡から出てエキシエフキルまでは前と同じ路を通つて、それから東に折れてアンゴラに行つて、それからシラスに行きます、それからハルブート、デアルベ、クルモスルを経てバクダードに達し、更に下でバサラに達し、終に波斯灣に出るのであります、此の二つが本街道で、今一つ其の中間に中街道がある、それは君士坦丁堡からアンゴラまでは同じ路を通つて行き、アンゴラからカイザリエに出で、それからマラシ、アインタブに出て、一方はアレツポを経て叙里亞に行き、一方はウルファを経てメソポタミアに行く街道であります、それから波斯灣街道と叙里亞街道とを結付ける幾多の横線がある、重なるものはアンゴラからカスタムニに出て、黒海の海岸に出る線、アンゴラから直ちにコニアに出でる線、コニアからカイザリエを経てシラスに行く線、カイザリエからアダナに出る線など、横の線が幾つもあり、海岸回りの線は船の交通が便でありますから、交通は船に依つて、陸路には依らぬから、海岸の道路は餘り發達して居りませぬ、是が先づ此の道路の一般の配置の有様でございます。

序に申上げて置きたいのは、波斯灣鐵道である、今日は獨逸が一手に引受けて計畫して居ります。

が、其の計畫は君士坦丁堡からバストラ、即ちチグリヌ、ユーフレートの河口の附近なるバストラまで行くのが目的であります、今日まで出來て居るのは最前申した叙利亞街道を通つて、コニア、カラマン、エレグリの各地を通過し、今日はエレグリの東北數哩の所で止つて居ります、是から先きは工事が困難です、ドーしてもタウルスを越えなければならぬのです、それでタウルスのどの邊を越えて行くかと云ふことは今研究中で一定の成案は無いやうに聞いて居ります、併し恐らくは此のアダナには出ないでアンチタウルスと云ふ方を回つてアレppoに出で、アレppoからユーフレートに沿つて下るのであらうと云ふことです、併ながら非常な難工事の上に、露西亞政府が色々妨害をするので、渉々しく行かぬと云ふことであります、兎に角何れの路を通るとしても將來餘り遠くない中に波斯灣まで此の鐵道が延びて行くに相違ない、私が小亞細亞を横斷しましたのは叙利亞、君士坦丁堡の本街道を通つたのであります。

此の前の叙利亞旅行の御話には埃及の方からバレスタインに上陸し、ジェルサレム、ダマスカス、アレppoを通つてイスケンデルンに達しました所まで御話しましたから、今日はイスケンデルンから君士坦丁堡までの旅行の御話を致さうと思ひます、で元來は陸路を取りまするとイスケンデルン灣から海岸に沿ふてアダナに出るのであります、さうすると大變に時間が掛ります、それ故に私はイスケンデルンから海路を取りメルシナとに上陸しました、此の間が約百六十料で六時間を費しました、陸路を參る路は困難の代りに又大變面白い所がある、有名なイッスで御承知の通りアレキサンドル大王がタウルスを越えて叙利亞の方に回つて來て波斯の大軍と此所で出會つて殆と

波斯軍を全滅せしめたと云ふ大激戦のあつたイッヌスを通ると、シリシアの平原と申す一つの大平野に出ます。此の平野は即ち今日のアダナ州で、丁度タウルスを北に脊負つて居り、南は地中海に面した豊饒な土地で氣候も大に温暖で物産も随分あります。殊にタウルスからは色々鑛物が産出します。外に野獸も澤山獲れる。或る獨逸人の直話によれば、彼は山中で長さ二間直徑四寸もある巨蟒を打ち取たと云ふことです。

それで私は先づイスケンデルンからメルシナに上陸しました。メルシナは人口一万五千斗りの都會です。こゝから日本里數で三里ばかり西南の海岸にポンペイオポリスと云ふ古趾があります。是は今ほソリーと云ふ村になつて居りますが、此所に羅馬時代の建築の遺物があります。是は希臘羅馬時代の大きな市街によく造られたもので、つまり往來の兩側に列柱を建て、其の上を蔽ふて雨を防いだもので、市民の集會や市場に用ゐたものです。此處の遺趾には列柱が凡そ百間も續いて居りますが、その柱が餘程面白いので、エンタシスと云ふて、輪廓が曲線形をなして上の方がつぼんで居ります。又柱のキャピタル即ち柱頭が一つ／＼違つて居りまして、意匠頗る自在です。傳記に依ると、此所に大なる神殿がありましたのをアルメニアの王のチグラネスが來て壞はして仕舞つたと云ふことです。(B.C.91) 兎に角羅馬時代の面白い遺物である。

それからメルシナから鐵道で二十七、五料東北に向て行くと、今度はタルスースと云ふ所に着きます。此都はキドヌス河畔にあつて人口一万八千斗り、歴史上重要な所でありませう。曾て歴山大王に屬し、叙利亞王國に屬し、羅馬に屬し、亞刺比亞人に取られ、ハルン、エル、ラシードの時、其の後アルメニ

ア人に占領され、此所にアルメニア王國が出来ました、それが又トルコマン人に奪はれ終りに今日
のオスマン人の領土に歸したのであります、其のアルメニア王國の時代のもものがタルスースに遺
つて居ります、城門の壁が少しばかり遺つて居ります、もう一つ珍しいのは此所にヅノックタシユと
云ふものがあります、是は直譯すると逆さ石と云ふのであります、是は平地の上に非常な大きな石
のブロックが二つあります、其周圍に厚い壁があります、史傳に依るとサルダナルスの墓である、
タルスースはサルダナルスの造つた都であると言つて居ります、果してどうであるか信ぜられ
ませぬが、此のヅノックタシユは混泥土で造られてあります、それから察すると羅馬時代のものであ
ると云ふことが察せられます、その外市内のキリセジャミは回教寺ですが、ビザンチンのアルメニ
ア式の面白い建築です、又アルメニア教會堂は波斯風の裝飾が施してあります、又市外キドヌス河
に壯快な瀑布があります、歴山大王はこの河に水浴して熱病に罹つたと云ふ傳説があります。

それからタルスースからアダナへ行きました、アダナはタルスースの正東四十料の所でアダナ
州の首府であります、サロス河に臨んだ非常に景色の好い所で、人口も三萬からあります、サロス河
の向ふには眞つ白に雪を被つたタウルスの連峰が見えますが、寫眞が上手でないのでよく撮れま
せんでした、これがその眞景です、是れはアダナの市街であります、是れはアダナにある古い回教寺
でウールージャミと申します、寺傳に依るとホラサンから來た土耳其人がこの地を占領し(A.D.13
78-1515) 後この寺を建てた(A.D.1549)と云ふことで元來は耶蘇教會堂でありました、今でもビザン
チウム式の柱か混用されて居ります、それからアダナで尤も古い遺物は橋でありまして、それはサロ

ス河に架けてある橋であります。此の橋は頗る壯大なもので、羅馬のジャステニアン時代の殘片が所々に遺つて居ります。又サロス河の右岸にはハルン、エル、ラシードの古城の趾(A.D.782)が殘つて居ります。それから此のアダナから東北の方に古跡が澤山あるのですが、それは訪問する時間がありませんから再びタルスースに引返してこゝからタウルス越を試みました。

タルスースから内地に這入るにはタウルス越をするので、大變困難な路であります。今日は馬車を通じますが、即ちタルスースからエレグリと云ふ處まで馬車で行くので、エレグリから君士坦丁堡までは瀟車が全通して居るから樂であります。エレグリ、タルスース間は日本里數で約三十九里、是は馬車を驅て行くと通例三日間、私の行きましたのは日の短い時でありましたので、四日間を費しました。このタウルス越は小亞細亞から叙利亞へ通ずる唯一の道路で昔しサイラス王、歴山大王、シセロ、ハルン、エル、ラシード、十字軍、イブラヒム、バシヤ等皆全し道を通りました。私は明治三十七年十二月三日にタルスースを出發し一名の護衛兵及從僕と一行三人一輛の馬車を驅て前進しました。それで第一日目にはタルスースを出發しキドヌス河に沿ふて上ぼりました。行くこと三里許で山路にかゝり、古への羅馬街道と離合して登ります。凡そ十里許りも行って此日はメザルオルクに一泊しました。素より完全な宿屋と云ふものはないので、只だ泥と板とで圍つた、アバラ屋へ用意の寢具を敷て寐る丈けでその困難なことは支那内地の尤もヒドイ處よりも一層ヒドイのです。況や氷點以下の寒風は四方から吹き込んで來るので、終宵夢を結び兼ねました。翌日またキドヌス河に沿ふて進みギユレク、ボガーツと云ふ處へ行くとこゝは分水嶺で海拔四千二百尺所謂シリシアン、グー

トと稱せられ、古來重要な關門でイブラヒム、パンヤの築いた要塞が今も残つて居ります、東羅馬では教徒の侵入を防禦する爲、こゝに城堡を築いたことがあるそうです、この分水嶺を越えると今度はサロス河の水界に出ます、一つの谷川を下つてサロス河の本流へ出た所がボザンジと云ふ處です、こゝからカイザリエへ分岐する路があります、又サロス河を溯て高山峻嶺の間を進みアク、ケブリ(白橋)で一泊しました、こゝの宿即ちハンと稱するものは尤もヒドイアバラ屋で土間の上へ藁蓆一枚敷いて寝ましたが夜半氷點以下四度の寒風に包圍され戰慄しながら夜を明しました、尤も盛に火を焚きました、が野宿全様ですから一向に効能がありません、翌日は全し谷川に沿ふて急峻なる阪を登りました、雪は追ひくゞに現はれ來り、終には一面純白の銀世界となりました、此日はチフテハンを過ぎバヤークに一泊しましたが例の通りの次第で温度は氷點以下六度に降りました、この邊から地勢漸く開いて高原の形となり、先日來の高山峻嶺は多くは眼下に見へますが、獨りブルガル岳は益々高く、巍々堂々として群山の上に君臨して居ります、この奥にブルガルマデンと云ふ村があり、カイマカムが居て鑛山の監督をして居るそうです、

翌日又進んでウルキシラと云ふ村を過ぎました、こゝは人家二三十もあり、タルスース以來始ての村らしい村です、今まで通過した村は只一つ或は二三のハンがある許りで住民と云ふてはハンの番人丈けで外には誰も居らない、全く村の体裁はないのでありました、このウルキシラは古へのファウスチノポリスであると考へられて居ます、即ちマルクス、アウレリウスの造つた所で女王ファウスチナが此處で死んだ爲にこの名を得たと云ふことです、この邊は山水の景色に富んで

居る上に鑛泉と鑛物が多いので、羅馬時代から訪問者があつたそうです。又前進すると懸てサロス河の流れを究め盡して分水嶺に達します。この處海拔凡五千五百尺許り、嶺上から四方を見渡した風景の偉大なことは實に驚くべきものです。

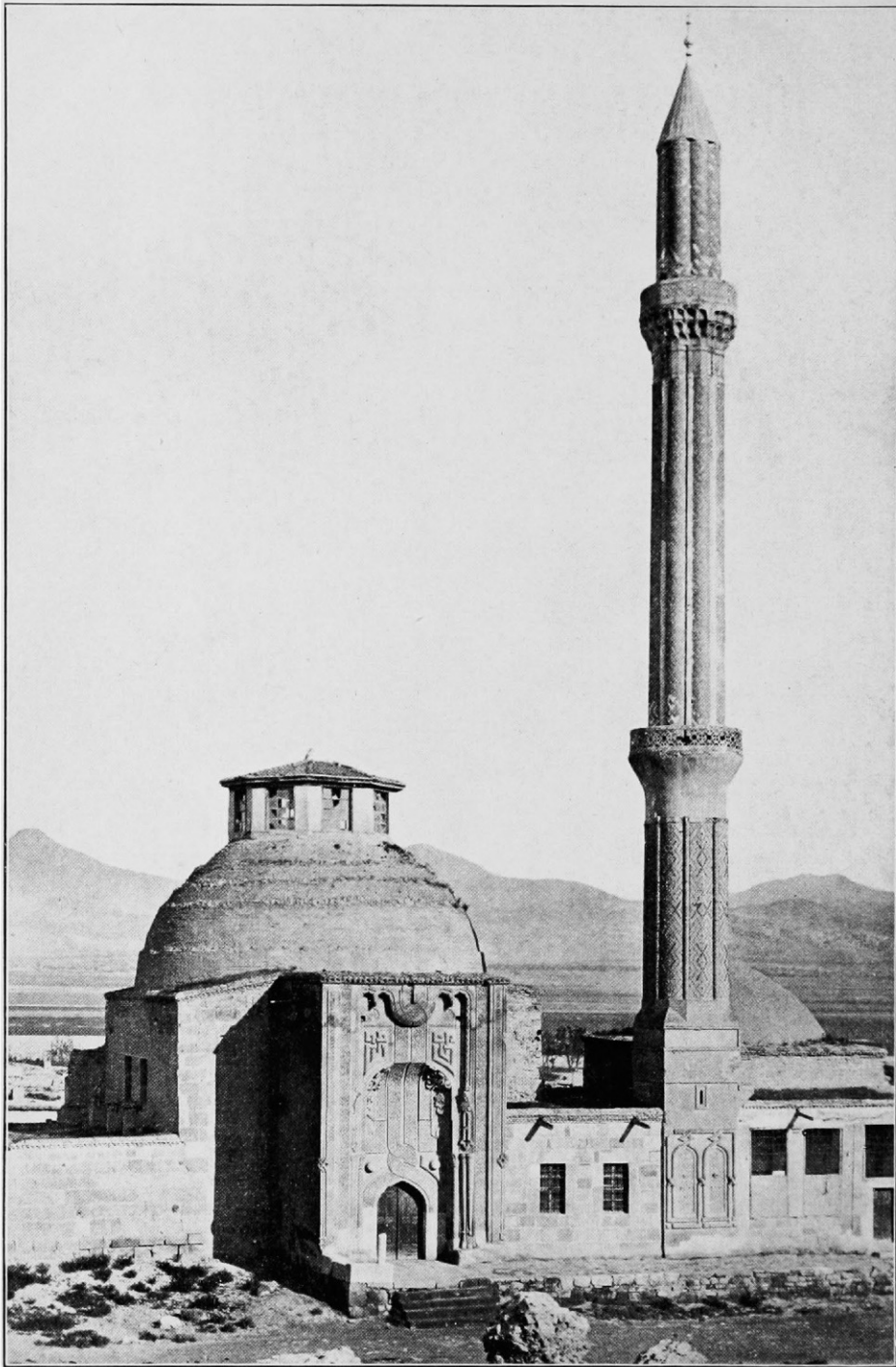
先づ南はタウルスの連山波濤の如く重疊して動き出さん勢を示して居ります。西北にはカラジヤ岳一帯の火山列を敷きて打て出て、北にはハッサン岳直立八千二百尺、富士山よりも美しい輪廓に雲の化粧を施して立ち、東北にはエルジエス岳儼然としてアンチタウルスの連峰の上にその頂を現はしたる、その間の平地はこれ渺茫たる鹽漠地で、廣袤百里に及びます。嶺を下ればブルガルツク村に出ます。又少しく進めば即ちエレグりに達します。即ち古へのカツバドキアの領土に入つたのです。

扱エレグりはコニヤ州に屬し、今日の所人口三千もある小都會でタウルス山の麓に位し、所謂山紫水明の景色を備えた所ですが、何分海拔四千尺に達して居るので氣候は寒冷です。古へのキピストラ、ヘラクレアに當るそうで曾てハルン、エル、ラシードに占領されたとがあつたそうです。近頃此處に一軒の埃國人のホテルが出来て居ました。ホテルと云つても歐羅巴のやうに立派なホテルではありません。免に角歐羅巴人が泊るをの出来るやうに設備をしてあります。何せ斯様な邊鄙な山中で戸數も僅か五六百しかない小さい所にホテルがあるかと云ふと、それは理由があります。此のエレグリから三里東南に行くとブルガル岳の麓にイザリースと云ふ所があつて、そこにヒチツトの古跡があります。それは前世紀に初めて發見されて其の後追々それを寫眞に撮つたり實測を

したり研究して今日は一般に知れ渡るやうになりました之を見る爲に態々土耳其の内地から或は小亞細亞の西海岸の方から歐羅巴人の旅行者が皆な此所まで踏込んで来る其の爲に近頃斯う云ふホテルが出来ました、イヅリーズのヒチットの古跡は此の寫眞であります(寫眞略す)岩の上に極く薄肉彫りに彫刻してあるので此所に二人の姿があります、左の大きい方は神で右の小さい方は神に禮拜をして居る坊様であります、此の神はヒチットの特有なる烏帽子のやうな斯う云ふ形の帽子を被つて居り、又足には是もヒチット特有のつま先の上へ反り上つた靴を穿いて居りま

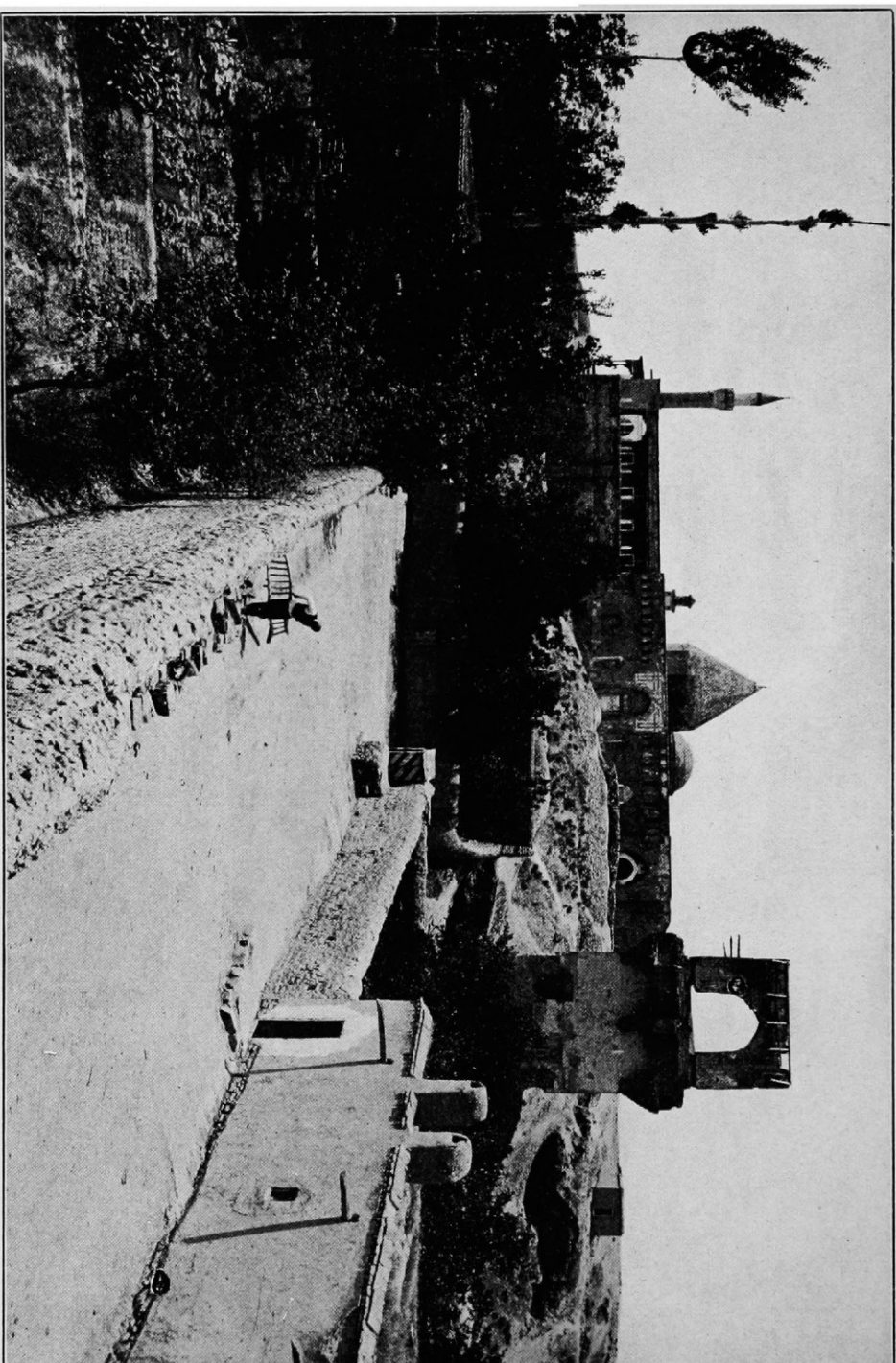
す、さうして手に葡萄を持つて居る、それから足の下に鋤のやうな物を置いて居る、それは土地の神様で、即ち農産物を人民に與へると云ふ意味のものであるだらうと云ふ想像であります、此所にヒチット文字が三ヶ所にありますがそれは未だ十分に讀めないと云ふことであります、兎に角非常に珍しい面白いものであります。

此邊には例のチェルケス人が多く住んで居ます、彼等は非常に貪慾で足るを知らないのです、タウルス越の山中のハンでは野宿全様なアバラ家を一夜供給して五ピアストル、我が四十二錢を取ります、支那内地ならば五十文七錢位も要らない處です、然るにこちらでは或は十ピアストルを請求し、その外湯代薪代まで請求する所もあります、或る獨乙人の紀行にも、タウルス山中で例の乞食小屋以下の宿へ泊つて、ホテル並の宿賃を請求され、散々に争つて大に時間を費したことが書てありました、(未完)

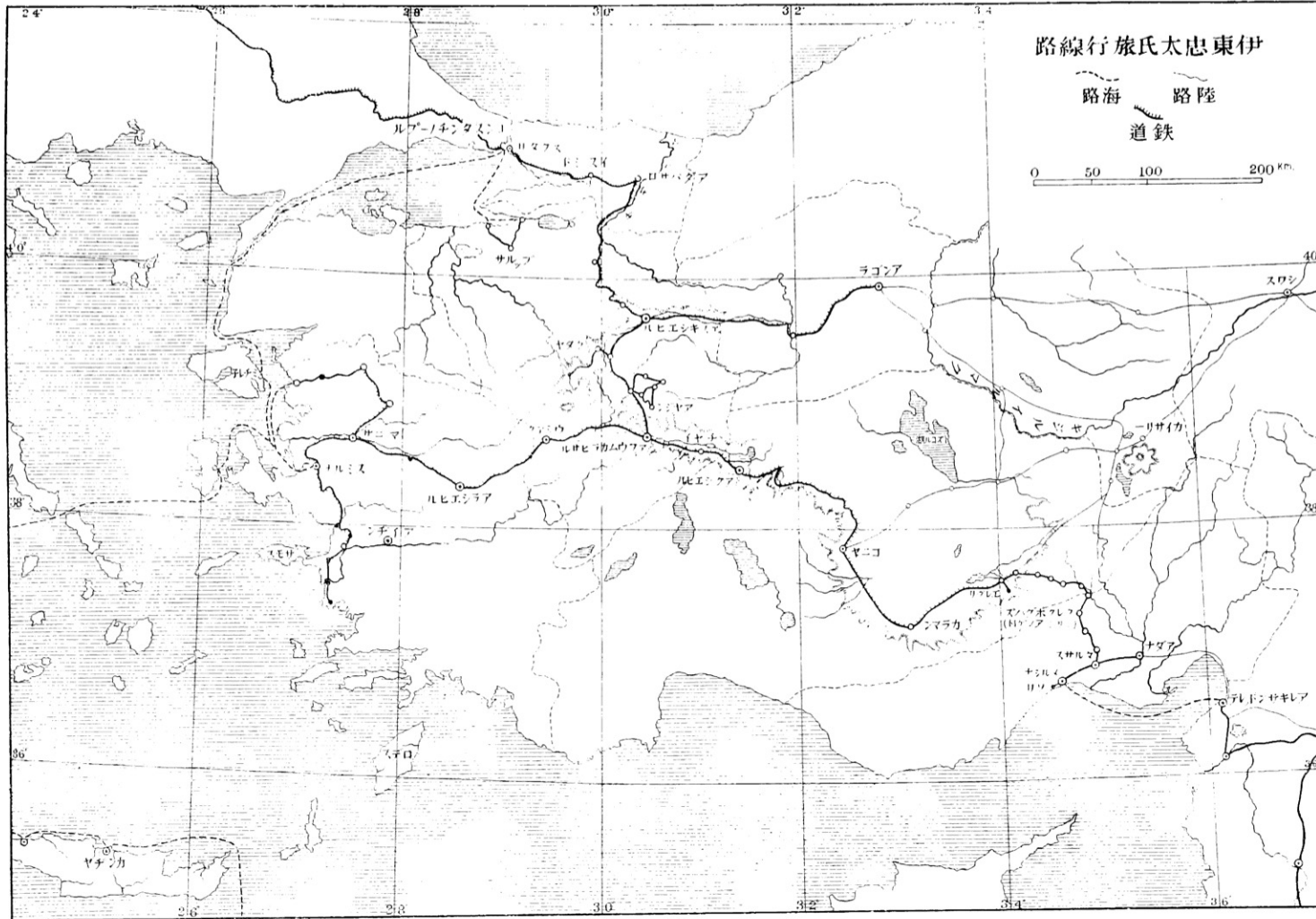


地學雜誌第十九年第一版 小亞細亞コニア市インジエミナレリ・メドレッセ。(高塔學堂)

Indje Minareli Medressé, Konia.



Ala-ud-din's Mesjid, Konia.



Sketch Map of Asia Minor showing Chuta Itō's Route of Travel.